










病害虫発生予察情報予報第 12 号 (3 月の予報)

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	3 月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病害虫 (抜粋)	
タマネギ	べと病	早生マルチ	並	 べと病 (一次感染株)
		中晩生	並	
	ボトリチス葉枯症		並	
	白色疫病		並	
	ネギアザミウマ		やや少	
1. べと病 3 月から本格的な二次伝染時期に入るため、伝染源となる一次感染株の抜き取りの徹底と、薬剤の予防散布を確実に実施する。				
施設果菜類	1. 虫害全般 (アザミウマ類、コナジラミ類、アブラムシ類) 気温の上昇に伴い、施設内の害虫の増殖が盛んになるとともに、施設内への飛び込みが増加する。多発生を防ぐため、低密度時からの薬剤防除を行う。 2. 病害全般 (灰色かび病、菌核病、すすかび病、葉かび病、べと病、うどんこ病、疫病、褐斑病) こまめな換気や早朝加温によって結露を防ぐとともに、発病部位の早期除去、予防的な薬剤防除を行う。			
イチゴ (本圃)	うどんこ病	やや少	 ハダニ類	
	灰色かび病	並		
	ハダニ類	並		
	アブラムシ類	やや少		
	1. ハダニ類 今後、気温の上昇に伴い、さらに増殖し防除が難しくなるので、早期発見、早期防除に努める。防除効果を高めるため、薬剤散布前に古葉を除去し、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。 2. 灰色かび病 高湿度条件が続くと発生が増えるので、こまめな換気と加温機や循環扇の稼働によりハウス内の湿度低減を図る。予防的な薬剤防除に努め、特に曇雨天が続くことが予想される場合は徹底する。 3. 親株の立枯性病害 健全苗を育成するため、感染の無い親株 (フリー苗、立枯性病害の発生が無い圃場から採苗した株等) を利用する。炭疽病については、伝染開始前の 3 月下旬から定期的な薬剤防除を実施するとともに、ビニルによる雨よけを行う。			

作物名	病虫害名 ^{注1)}	3月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
キュウリ	べと病	並	 キュウリ退緑黄化病
	うどんこ病	並	
	褐斑病	やや少	
	アザミウマ類	やや少	
	コナジラミ類	多	
1. タバココナジラミ：退緑黄化病 退緑黄化病の発生が各地で認められる。罹病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取り、圃場外に持ち出して適切に処分する。また、圃場に黄色粘着板を設置するなどしてタバココナジラミの早期発見に努め、低密度時から薬剤防除を徹底するとともに、本虫の寄生する不要な葉は除去し、適切に処分する。			
トマト	葉かび病	少	  黄化葉巻病 黄化病
	灰色かび病	やや少	
	コナジラミ類	並	
1. コナジラミ類：黄化葉巻病、黄化病 幼虫・蛹の寄生の多い下葉を除去し、密度を下げたうえで、薬剤防除を徹底する。ウイルス病の罹病株を認めた場合には、早急に除去処分する。			
果樹共通	1. 果樹カメムシ類 果樹カメムシ類は3月下旬ころから活動を開始するため、ウメ、ビワ、スモモ、モモなどの早い時期から加害される果樹では園内をよく観察し、侵入・加害を確認したら早急に薬剤を散布する。		
カンキツ	かいよう病	並	 かいよう病（葉）
	ミカンハダニ	並	
	1. かいよう病 発芽前の防除が重要である。罹病葉、罹病枝は必ず除去するとともに、罹病性品種（レモン、ネーブル、はるみ等）、温州みかんにおいても前年発生が確認された園や新梢の伸長が遅くまで続く幼木、高接樹、隔年交互結実栽培園などでは、3月上旬（発芽前）までに必ず銅剤を散布する。 2. ミカンハダニ マシン油乳剤をまだ散布していない園では、発芽前までに散布する。 3. 樹勢低下樹等への薬剤散布 発芽直前は落葉しやすいので、前年度の結果過多樹、干害、寒風害、低温障害などで樹勢が低下している樹では、発芽前の銅剤、マシン油乳剤の散布を控え、生育期の薬剤散布で対応する。		
ナシ	1. 黒星病 落葉は主要な伝染源となるので、園内から除去し適切に処分するとともに、発芽直前及び発芽初期の防除を徹底する。		

キウイフルーツ	1. かいよう病 発病樹では、枝や幹からかいよう病菌を含む乳白色の樹液が漏出し（右写真参照）、その後、暗褐色に変化する。この樹液の漏出の早期発見に努め、発見した場合は直ちに切除する。また、すべての園において、感染防止のため、6月まで銅水和剤を主体とした定期的な薬剤防除を徹底する。		 かいよう病菌を含んだ樹液の漏出	
茶	カンザワハダニ	やや少	 カンザワハダニ	
	1. 赤焼病 被害拡大防止のため、発生を認めた場合は直ちにカスミンボルドーや銅剤の散布を行う。なお、ハダニやチャトゲコナジラミ等の防除でマシン油を散布すると本病の発生を助長するので、発生を軽減させるためマシン油乳剤の散布2～7日前に銅剤を散布する。 2. 灰色かび病 花が多い茶園では、3月中旬ごろにフロンサイドSCやベフドー水和剤等を散布する。 3. チャトゲコナジラミ 生育ステージが揃う越冬世代（幼虫）に対する防除効果が高いため、3月までにマシン油乳剤散布による防除を徹底する。			
キク	白さび病	やや少	 クロゲハナアザミウマ	
	アザミウマ類	並		
アブラムシ類		並		
ハダニ類		並		
ハモグリバエ類		並		
1. アザミウマ類 一部圃場で発生を確認している。今後、気温の上昇に伴い、本虫の増殖が盛んになるため、低密度からの防除を実施する。薬剤は、本虫が多く寄生する葉裏等に十分かかるように散布する。				

注1) 病害虫名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病害虫について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病害虫総合防除計画」も参照してください。

病害虫総合防除計画掲載アドレス

https://www.pref.saga.lg.jp/ki_ji003101844/index.html

QRコード→



II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去10年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「佐賀県病害虫総合防除計画」をご参照ください（3ページの注釈にリンクが有ります）。

写真

- 1～3ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。

3月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する3月の気象条件については、福岡管区気象台発表の1ヶ月予報（令和7年2月20日）を基に、「気温：平年並」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1ヶ月予報における3月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	30	50 (10.4℃)	20	並
降水量	40	30 (120.6mm)	30	並

Ⅲ. 3月の予報

タマネギ

[【概要に戻る】](#)

定期調査 20 圃場、防除員 4 圃場
調査日：2月17～22日

1. ベと病（早生マルチ）

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（一次感染株の発生推移を図1に、二次感染株の発生推移を図2に示す）

一次感染発生株率：0.01%（平年0.13%、前年0.04%）、平年比：やや少（-～±）

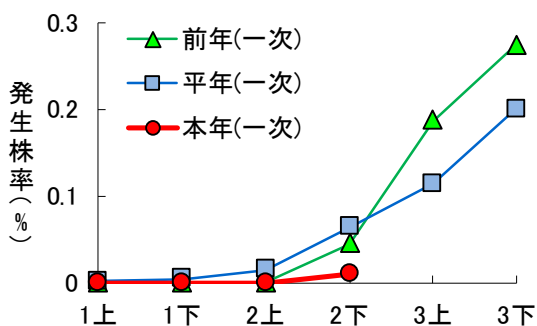


図1 早生タマネギでのべと病（一次感染株）の発生推移

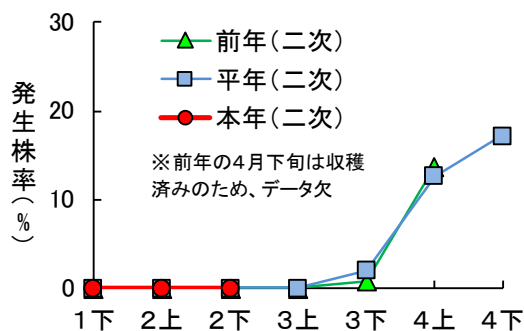


図2 早生タマネギでのべと病（二次感染株）の発生推移

注) 図1と図2の平年値は、2017～2024年の8年平均。

(2) 3月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 3月から本格的な二次感染時期に入るため、伝染源となる一次感染株の抜き取りの徹底と、薬剤の予防散布を確実に実施する。

(2) 早生では3月上旬～4月上旬が主要な伝染時期であるため、この時期にジマンダイセン水和剤を基幹とした予防散布を徹底する。散布間隔は10日間を基本とするが、前回散布の7日後以降に曇雨天が予想される場合は、前倒して散布を行うなど、雨前の防除を徹底する。

2. ベと病（中晩生）

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（一次感染株の発生推移を図1に、二次感染株の発生推移を図2に示す）

一次感染発生株率：0%（平年0.05%、前年0.01%）、平年比：やや少（-～±）

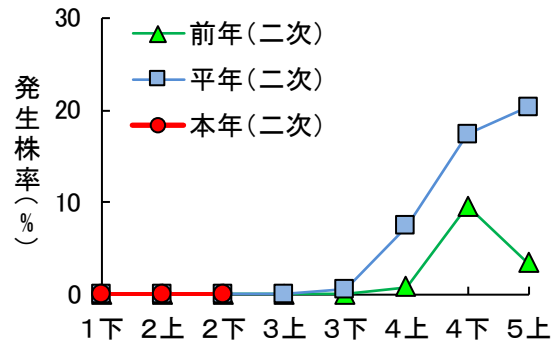
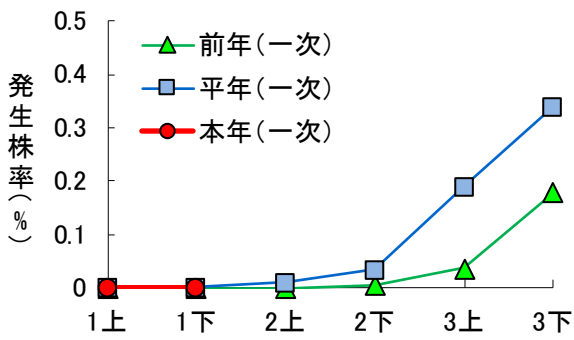


図1 中晩生タマネギでのべと病(一次感染株)の発生推移 図2 中晩生タマネギでのべと病(二次感染株)の発生推移

注) 図1と図2の平年値は、2017～2024年の8年平均。

(2) 3月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件(±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 3月から本格的な二次伝染時期に入るため、伝染源となる一次感染株の抜き取りの徹底と、薬剤の予防散布を確実に実施する。
- (2) 中晩生では3月下旬～4月下旬が主要な伝染時期であるため、この時期にジマンダイセン水和剤を基幹とした予防散布を徹底する。散布間隔は10日間を基本とするが、前回散布の7日後以降に曇雨天が予想される場合は、前倒しで散布を行うなど、雨前の防除を徹底する。

3. ボトリチス葉枯症

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率：0% (平年1.3%、前年0.5%)

平年比：やや少(一～±)

(2) 3月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件(±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生を認めた場合には、速やかに薬剤防除を実施する。
- (2) 予防的な薬剤散布に努め、特に曇雨天が続くことが予想される場合は徹底する。

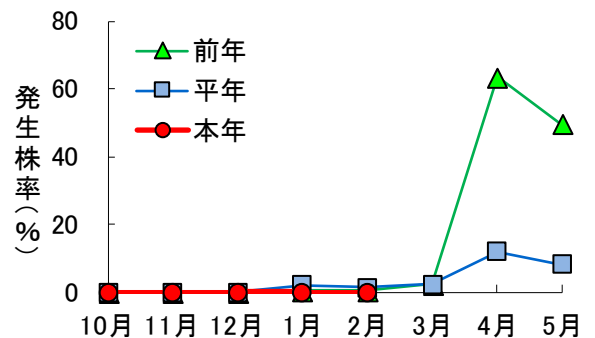


図1 タマネギボトリチス葉枯症の発生推移

4. ネギアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率：0.7% (平年2.7%、前年0.2%)

平年比：やや少(一～±)

(2) 3月の気象予報

気温は並で、並発生の条件(±)

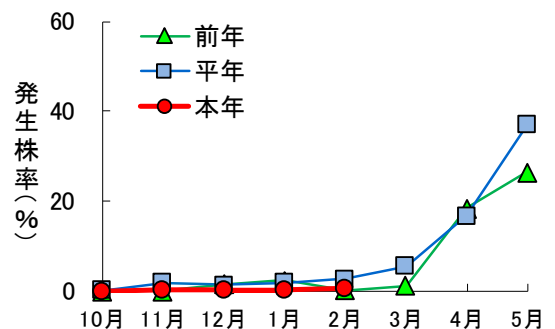


図1 ネギアザミウマのタマネギでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生を認めた圃場では、低密度時から薬剤防除を行う。
- (2) 本虫は薬液のかかりにくい葉の隙間に寄生しているので、薬剤はそれらの部位にもかかるよう、生育に応じた十分量を丁寧に散布する。

イチゴ（本圃）

[【概要に戻る】](#)

定期調査 10 圃場、防除員 6 圃場
調査日：2月14～20日

1. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年1.4%、前年0%）

平年比：やや少（-～±）

(2) 3月の気象予報

降水量は並で、並発生条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発病部位の早期除去と予防的な薬剤防除を組み合わせる。

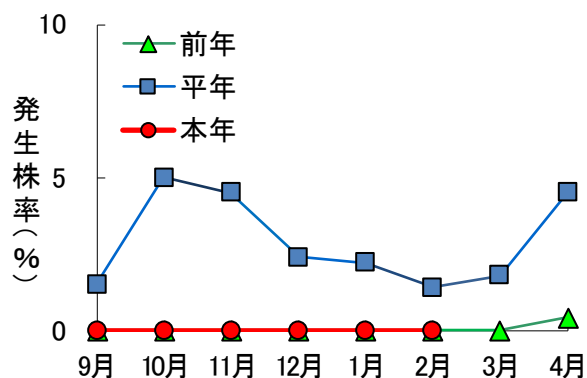


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：21.8%（平年23.6%、前年21.8%）

平年比：並（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 早期発見、早期防除に努める。
- (2) 防除効果を高めるため、薬剤散布前に古葉を除去し、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。
- (3) 天敵を放飼した圃場であっても、ハダニ類の増加を認めた場合は天敵に影響の少ない薬剤による防除を行う。

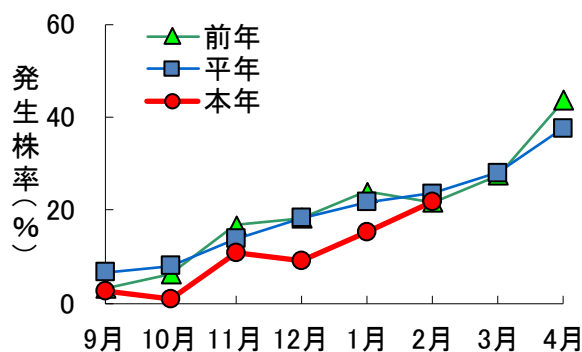


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

キュウリ

[【概要に戻る】](#)

定期調査 5 圃場、防除員 2 圃場
調査日：2月17～20日

1. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0%（平年 3.1%、前年 0%）

平年比：やや少（-～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) ミナミキイロアザミウマは黄化えそウイルスを媒介するため、低密度時から薬剤防除を徹底する。

(2) 黄化えそ病の罹病株は伝染源となるので、圃場をよく観察して早期発見に努め、罹病株は圃場外に持ち出して適切に処分する。

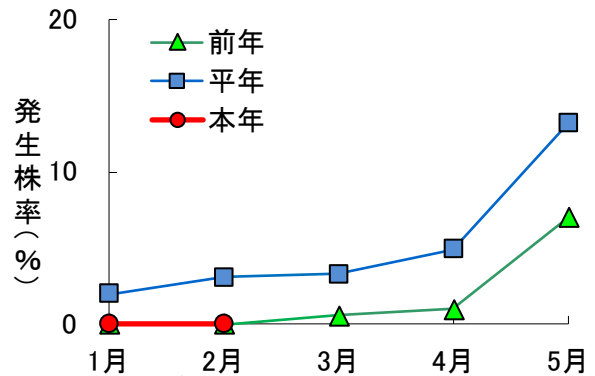


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移

2. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：7.1%（平年 0.6%、前年 0%）

平年比：多（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) タバココナジラミは退緑黄化ウイルスを媒介するため、低密度時から薬剤防除を徹底する。

(2) 本虫の寄生する不要な葉は除去し、適切に処分する。

(3) 退緑黄化病の罹病株は伝染源となるので、圃場をよく観察して早期発見に努め、罹病株は圃場外に持ち出して適切に処分する。

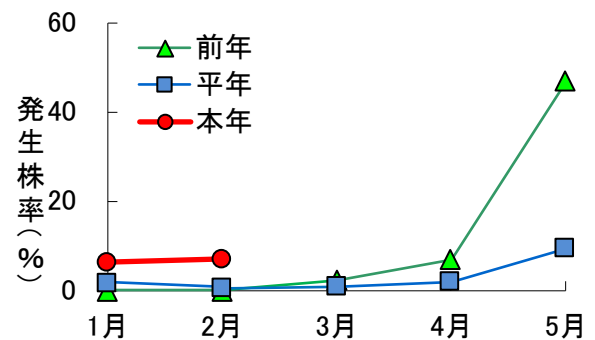


図1 コナジラミ類のキュウリでの発生推移

トマト

[【概要に戻る】](#)

定期調査：6 圃場、防除員 4 圃場
調査日：2月17～20日

1. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

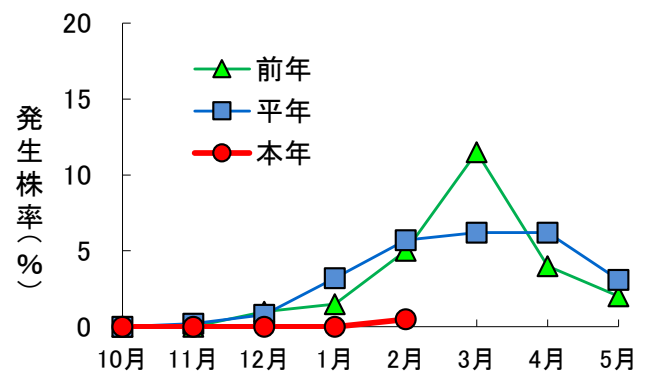


図1 トマト灰色かび病の発生推移

①定期調査 (図1 参照)

発生株率：0.5% (平年 5.7%、前年 5.0%)

平年比：やや少 (一~±)

(2)3月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1)こまめな換気や早朝加温によって結露を防ぐとともに、発病部位の早期除去、予防的な薬剤防除を行う。

2. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1)発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生株率：5.0% (平年 3.7%、前年 6.5%)

平年比：並 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 幼虫・蛹の寄生の多い下葉を除去し、密度を下げたうえで、薬剤防除を徹底する。

(2) ウイルス病の罹病株を認めた場合には、早急に除去処分する

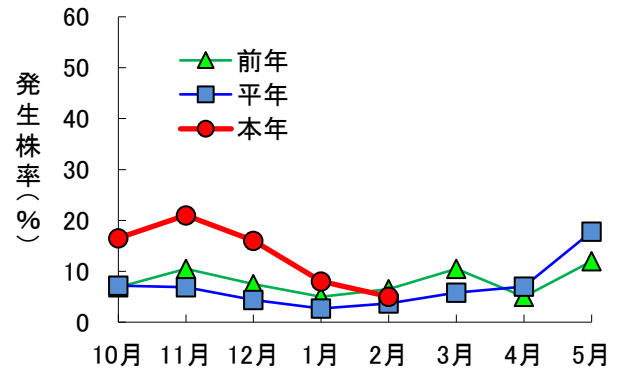


図1 コナジラミ類のトマトでの発生推移

カンキツ

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8 圃場

調査日：2月18~19日

1. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1)発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生葉率：0.0% (平年 0%、前年 0.1%)

平年比：並 (±)

(2)3月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病葉、罹病枝は必ず除去する。

(2) 罹病性品種 (レモン、ネーブル、はるみ等) や、温州みかんでも前年に発生が確認された園や新梢の伸長が遅くまで続く幼木、高接樹、隔年交互結実栽培園などでは、3月上旬 (発芽前) までに必ず銅剤を散布する。

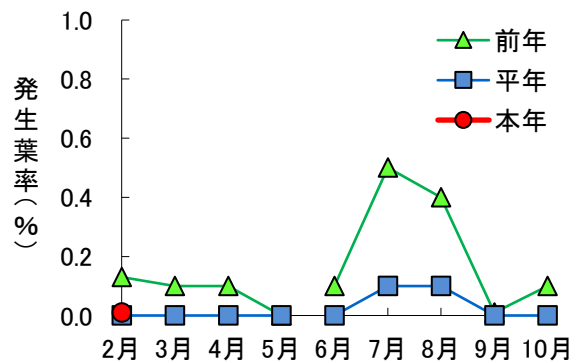


図1 カンキツでのかいよう病の発生推移

(注：5月下旬までは旧葉、6月以降は新葉を調査)

茶

[【概要に戻る】](#)

定期調査：7 圃場
調査日：2月18～19日

1. カンザワハダニ

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査 (図1 参照)
発生葉率：0.3% (平年 2.0%、前年 4.9%)
平年比：やや少 (一～±)
 - ②3月の気象予報
気温は並、降水量は並で、並発生の条件 (±)
 - (2) 防除上注意すべき事項
 - (1) 多発後の薬剤散布では、防除効果が不十分となるため、萌芽前までの防除を徹底する。
 - (2) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。

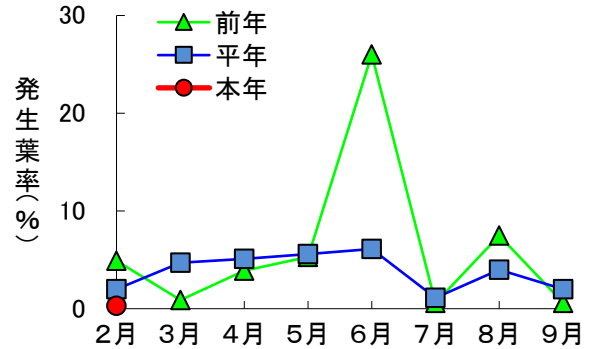


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

キク

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8 圃場
調査日：2月17～20日

1. 白さび病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや少ない
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ①定期調査 (図1 参照)
発生株率：0% (平年 2.8%、前年 0%)
平年比：やや少 (一～±)
 - ②3月の気象予報
降水量は並で、並発生の条件 (±)
 - (2) 防除上注意すべき事項
 - (1) 換気を行うなど施設内の適切な湿度管理に努めるとともに、発病前からの定期的な薬剤散布を実施する。
 - (2) 発病を認めたら、罹病葉は除去し、圃場外へ持ち出し適切に処分する。

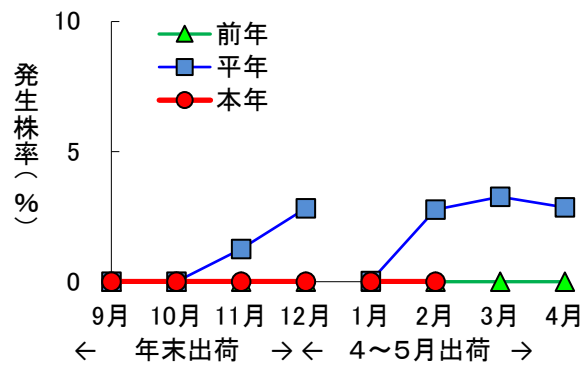


図1 キク白さび病の発生推移

2. アザミウマ類 (クダハアザミウマ、ミナキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ)

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生株率：3.8% (平年2.3%、前年3.4%)

平年比：並(±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) ミカンキイロアザミウマが媒介するキクえそ病 (TSWV)・茎えそ病 (CSNV) の発病株は早急に抜き取り、圃場外へ持ち出し適切に処分する。併せて、本虫を対象とした薬剤防除を早急を実施する。

(2) 今後、気温の上昇に伴い、本虫の増殖が盛んになるため、低密度からの防除を実施する。

(3) 薬剤は、本虫が多く寄生する葉裏等に十分かかるように散布する。

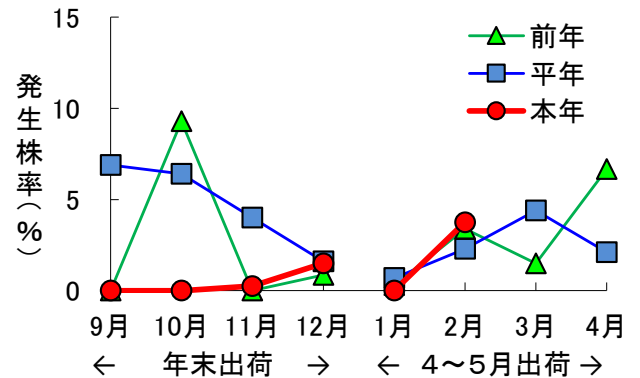


図1 アザミウマ類のキクでの発生推移

3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査

発生株率：0% (平年0.2%、前年0%)

平年比：並(±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

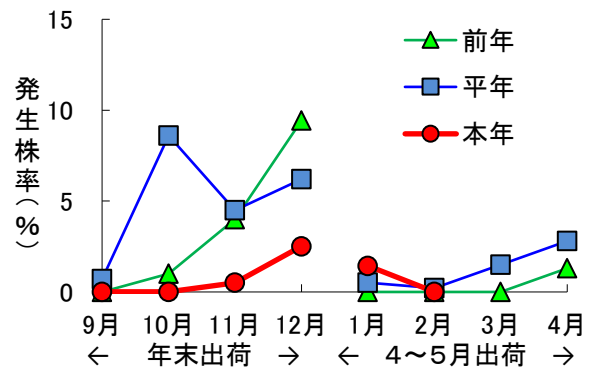


図1 ハダニ類のキクでの発生推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病虫害防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00321899/index.html>

病虫害総合防除計画掲載アドレス <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji003101844/index.html>

防除セ QR コード



防除計画 QR コード

